ベルニーニの《バルダッキーノ》に関する一考察
―バルベリーニのミツバチと台座の小モチーフ―

成城大学 佐藤 仁
SATO Jin

サン・ピエトロ大聖堂の主祭壇を飾る《バルダッキーノ（大天蓋)》(1624～35）は、教皇ウルバヌス 8 世の命で制作されたベルニーニ初期の代表作であり、バロック美術の幕開けを告げる記念碑的作品と考えられている。この作品に関する近年の研究は、その特異な形態が創造されるまでの過程の解明を中心になされてきた。そのため、作品自体のもつ意味については、これを対抗宗教改革におけるローマ・カトリック教会の勝利のモニュメントと捉え、教皇ウルバヌス 8 世を称揚する意図をもっていたとするウィットコウアーの研究以来、改めて議論されることがないのが実情である。本発表は、バルベリーニ家の紋章であるミツバチと、台座の小モチーフに注目することで、制作の背景に、自然科学研究やキリスト教の教義に対するウルバヌス 8 世の幅広い関心があったことを指摘し、《バルダッキーノ》のもつ意味について再考しようとするものである。

《バルダッキーノ》制作の背景に、当時重要な活動を展開していた自然科学アカデミー、アカデミア・デイ・リンチェイの活動があったことは見過ごされてきた。最も注目すべきは、制作の過程で、ベルニーニがバルベリーニのミツバチにふさわしい造形を決定するのに、同アカデミーの研究成果が利用されたと思われる点である。事実、ミツバチの造形は《バルダッキーノ》の前後に変化が見られる。この変化は、ウルバヌス 8 世に献呈されたアカデミーの主催者チェージの著作『アピアリウム』(1625 年）を抜きにしては考えられない。バルベリーニのミツバチには、ガリレオの顕微鏡を用いて観察された最先端の研究成果が反映しているのである。

一方、台座に付されたメダルやロザリオ、トカゲなどの小モチーフは、ベルニーニの遊びと見なされ、あまり注目されてこなかった。しかし、これらの小モチーフは、《バルダッキーノ》の周囲に配された聖遺物への教皇の姿勢を示していると考えられる。メダルとロザリオについては、キルウィンが指摘したように、その前に位置する「ヴェロニカの聖顔布」への祈りを示唆していると思われる。また、台座に点在するトカゲのモチーフは、フィレンツェ洗礼堂ブロンズ門扉以来のトスカーナの伝統に繋がり、バロック期のローマでも、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂パオリーナ礼拝堂を飾るブロンズ製の柵に見出される。トカゲは、《バルダッキーノ》の鋳造とトスカーナ美術家たちの関係を示す重要なモチーフだといえる。さらに、トカゲは聖なるものの守護者としての意味を持ち、ここでは、主祭壇とその下に眠る聖ペテロの墓を守る役割を担っていると考えられるのだ。

このように、ミツバチや小モチーフは重要な意味を持っていたと考えられる。と同時に、それらは、《バルダッキーノ》が当時の新しい自然科学研究などに対するウルバヌス 8 世の広い関心によって生み出されたということを示唆しているのである。